

# 草庵仏教

第195号  
(発行日)  
2006年9月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
63-4488  
(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp  
http://www.eonet.ne.jp/^souan

《聞法会ご案内》  
○〈同朋の会〉  
毎月22日午後2時  
.....  
○〈念仏座談会〉  
毎月2日および12日  
午後3時より。  
○真宗共学会——毎月第一と  
第三木曜日午後7時より。  
\*8月22日同朋の会および8  
月12日念仏座談会は休みます

## 真宗問答(二十六) 第十八願その四

A「弥陀の第十八願を聖人は(至心信樂の願)とも名付けられました。したが、そのことについては先月号で、私たちはまことの信心を自分の側から起こすことも、また得ることもできないものであること、そのことを法蔵菩薩(阿弥陀仏)は見通され、私たちに本願を信じる信心までも与えて私たちを救おうとされた、ということでしたね」  
D「ええそうです」  
A「ではどのようにして私たちに本願を信じる信心を与えてくださるのか、その点をもう少しお話ください」  
D「どのようにして衆生に信心を与えてくださるのか。これは私たちの思いのとても及ぶことではありませんが、それでもあって、聖人の思し召しをたどりながら伺いたいと思います。さて、お念仏を称えていても、なおそれが私の上で救いにならないのは、念仏にかけられている本願を信じていないからです。本願を信じている信心によつて浄土に往生することが定まることを聖人は明確に示されました」  
A「念仏を称えるのではあるけれども、念仏にかけられている

阿弥陀仏の誓いを信じる信心がかなめだということですね」  
D「そうです。信心によつて我が身の救いが決定するのです」  
\*  
A「ではどうしたら本願を信じられますか」  
D「その点です。本願を信じるというけれども、その弥陀の本願は、一切衆生を平等に浄土に往生せしめんと念仏往生の誓願であり、この法について釈尊は、(極難信の法)といわれています。極めて信じることの難しい法だと仰せられるのです。大無量寿経には  
この経を聞きて信樂受持すること、難きが中に難し、これに過ぎて難きことなし。  
とか、阿弥陀経には  
もろもろの衆生のために、この一切世間に信じ難き法を説きたまう  
また、  
一切世間のために、この難信の法を説く  
と説かれ、聖人も御和讃に  
十方恒沙の諸仏は  
極難信ののりをとき  
五濁悪世のためにとて  
証誠護念せしめたり

と述べられています」  
A「念仏往生の願は一切衆生を(衆生の存在のありのままに救おう)という驚嘆すべき救済ですが、この法は極難信の法であって、衆生が信受することは極めて難しい法だと釈尊はもうさされているのですね」  
D「そうなんです。信じることが極めて難しい、いな衆生の方からは信じることの不可能な法だとの思し召しでありましょう」  
A「なぜこの極難信の法を信じるのは難しいのでしょうか」  
D「その主な理由は、私たちは真実に対して無智であり惑える凡夫であります。一方弥陀の本願は人智を超えた仏智から現れた法であります。その法は人智にとつては不可思議というほかにないもので、人智の到底思及ぶものではないのです。ですから私たち凡夫の了見に弥陀の本願は収まりきれずはありません。この不可思議な本願を(まことなり)と了解し、納得し、受け入れるということは、極めて難しいといわねばなりません。いな凡夫には不可能といわざるをえません。このように、凡夫の知恵で仏智を計り知ることとはとてもできるものではないことを大無量寿経では  
如来の智慧海は、深広にして涯底なし。二乗の測るところにあらず。唯仏のみ独り明らかに了りたまえり。

(如来の智慧の大海は、とても深く広く果てしなく、声聞や菩薩でさえも思いはかることはできない。ただ仏だけがお知りになることができます)  
と釈尊は仰せられています」  
A「仏智より現れ出た本願を凡夫の知恵で計り知ることとはできないから、凡夫にとつては極難信の法だといわれるのですね」  
\*  
D「そうお聞かせいたただいています。しかしそれは裏返しに言えば、凡夫の知恵を遙かに超えたこの上ない弥陀の智慧の結晶した、極めて有難い法が本願の法であるといえましょう。さらに極難信の法は、無上の仏智から現れ出た法であるにもかかわらず、私たちの方から念仏往生の願を信じにかけられ、なんとか信じたい、どうかすれば信じられると、どこまでも自分の力で本願をつかみにかかり、信じにかけられ、いつかは信じられると、いつまでも自分の知恵

《秋季彼岸法要》  
9月22日(金)  
午後2時始まり  
どなたでもご自由にご参詣ください。

を見限らず、仏智（本願）をたのまないのです。我が身が本願を信じる力もたのむ力もさらさら無い、全く出離の縁なき凡夫であり、救われがたき身であることを知らず、知らないままに流転してしまふのです」

A「そうすると極難信の法とは私たちの側の知性でそれをつかんだり、信じようとして計らう、その愚かさや・慢さを知らせて、私たちの計らいを捨てしめたもうところの教えの言葉ともいえるのですね」

D「ええそうです。釈尊はこうした私たちを見通され、おまえに信じられるような小さな法ではない」と私たちの自力無効を知らせてくださるのです」

A「釈尊は、弥陀の本願は極難信の法であることをお示しくださって、私たちが弥陀の本願に対して計らう心を、否定してくださるのですね」

D「ええそうです。そしてそのことよって、私たちは自らの愚かさ目覚めていくのです。仏法は私たちにまことの安らぎを与えるだけではなくて、私たちの姿を知らせ、真実に目覚めていくプロセスが組み込まれているのです。聞法するということは（お育て）でもあるのです。

単に幸せになることではなくて、真実に目覚めていく道であります。鯛の頭も信心からという信心や、あそこのお地藏さんに参ったら功德があるという信心や、

あの神社の神さんのおかげがあるという信心には、自分の姿に目覚め、真実を知らせていただくという（お育て）はありませぬから、いつまでも惑いの中でどうどう巡ります」

A「では、極難信の法であるにもかかわらず、どこまでも人知でもって信じよう、助かろうという計らいがなかなか離れられないのはどうしてなのですか」

D「そのままたりで助ける」とまで仰せくださる（本願ですが、私たちが（このままで救われなくては助かりようの無き身）であることを知らず、邪見・慢に住していることも知らず、慢な心にたぶらかされているからです。聖人は『正信偈』に

弥陀仏の本願念仏は、邪見・慢の悪衆生、信樂を受持すること、はなはだもって難し。難の中の難、これに過ぎたるはなし。

（阿弥陀仏の本願念仏の法は、よこしまな考えを持ち、おごり高ぶる自力のものが、信じることは実に難しい、難の中の難であり、これ以上難しいことはない）と仰せられています」

A「私たちの側からは本願念仏を信じることができないなら、私たちに真実の信心はどこから成就するのでしょうか」

D「念仏往生の願を私たちにかけてくださり、（必ずタスケルただ念仏するばかりでよい）と

一切衆生を平等に救おうとのお念仏でありながら、その誓願を信じる力が全く我々にはないということ。実はそのことを徹底的に知り抜きたもうたのも法蔵菩薩なのです。（衆生は無明に惑い、煩惱に翻弄されて、清浄な信心もなくて、得がたいものであると徹見したもうたのです」

A「私たちに信心が元々無いし、また信心を得ることも私たちにできないということ、それを本當に知ってくださったのが法蔵菩薩様なのです」

D「法蔵菩薩様は衆生の側には己を救うようなまことな流れば信心もないゆえどこまでも流転していかねばならないことを悲しみ給い、私どもに仏になる因としての信心を与えようと願われしました。その願いが第十八願に込められています」

A「どう表されていますか」

D「それは十八願には至心信樂欲生我国（至心に信樂して我が国に生まれんとおもえ）と仰せくださっているのです」

A「至心信樂欲生我国というのはどういう意味なのですか」

D「聖人のご了解を通して読ませていただきますと、至心信樂欲生我国を三つの心すなわち至心と信樂と欲生我国に分け、至心は、念仏往生が間違いなく衆生の救いとなるべく、名号の功德（仏となる功德）を私どもに

代わって法蔵菩薩ご自身が真実なる永劫の修行によって完成し、この修行によって成就した功德を南無阿弥陀仏として仕上げてくださいったこと、だから（この南無阿弥陀仏で必ず助ける、助かるに間違いがないぞ）とのお心が至心であります。また信樂は、

（この南無阿弥陀仏で衆生が助かることにつゆちりほども疑いがない）という如来法蔵様の無疑のお心であります。最後の欲生我国は、（それゆえこの南無阿弥陀仏で我が浄土へ生まれさせるから生まれることができるとおもえ）との招喚の喚び声となり

A「そうすると三つの心（三心）はすべて如来法蔵様のお心なのですか」

D「ええそうです。三心はつづめていえば、如来法蔵様が、この南無阿弥陀仏は（汝が仏になる修行はすべて仕上げ、間違いない疑いなく助けるぞ助かるぞ）との仰せであり、弥陀の真実信心（至心信樂）のこもった名号を私に与え、喚びかけたもうみ心であります。この三つの心すなわち三心は別々のものではなく純粋な阿弥陀仏の大悲心の内容です」

A「信心は三心として分けることができず、その本質は如来の大悲の心なのですか」

D「ええそうです。この大悲心が南無阿弥陀仏にこもって

いて、その大悲の心のこもった南無阿弥陀仏を私たちに与えてくださるのです」

A「今称えさせていたでいて南無阿弥陀仏のお念仏は、阿弥陀仏の大悲の心一杯がこもった誓いの御名なのですか」

D「そうです。お念仏は（この南無阿弥陀仏で助けるぞ）との大悲の心の現れであり、大悲の現れの称名であります。その大悲の誓いの御名を聞くところに大悲の心が私に届いて信心とな

ってくださいます。（至心信樂欲生我国）の心、すなわち（この南無阿弥陀仏で間違いなく疑いなく助けるぞ）と喚びかけてくださるお心、その大悲の心が届いて、本願を信じる私の信心となってくださいます。不思議なことです」

A「私の中からは信心は起こりようも、起こしようもないけれども、南無阿弥陀仏を私に与えて聞かせてくださることによって、南無阿弥陀仏にこもる如来の大悲心がはからずも私の心に届いて信心となってくださいますね」

D「そうなんです。私には仏になる因は一つないけれども、そんな私に南無阿弥陀仏の行信が与えられて仏因となってくださいます。ですから私どもの助かる因は阿弥陀仏からいただくのであります」（了）

# 歎異抄 第一章第三講

弥陀の誓願不思議にたすけられまいら  
せて、往生をばとぐるなりと信じて念仏  
もうさんとおもいたつころのおこると  
き、すなわち撰取不捨の利益にあずけし  
めたまうなり。(歎異抄第一章より)

現代語訳(阿弥陀仏の誓願の不可思議なほ  
たらきにお救いいただいて、必ず浄土に往  
生するのであると信じて、念仏を称えよう  
という思いがおこるとき、ただちに阿弥陀  
仏は、その光明の中に撰め取つて決して捨て  
ないという利益をお与えくださるのです)

阿弥陀仏の誓願に助けられて浄土へ往生  
することができると信じて念仏をもうそう  
と思ひ立つ心が起きる、その時即座に撰取  
不捨の利益をたまわるのであるということ  
で、その阿弥陀仏の誓願とはそもそも何か  
ということとは先月号に述べました。それは  
歎異抄第十一章にハッキリと示されている  
ように、

〈誓願の不思議によりて、たもちやすく、  
となえやすき名号を案じいだしたまい  
て、この名字をとなえんものを、むかえ  
とらんと、御約束あること〉

とありますから、念仏往生の願のことをさ  
しておられるのであります。念仏往生の願  
とは、阿弥陀仏の第十八願、ことに乃至十  
念若不生者不取正覺というお誓いで、これ  
が一切衆生を平等に救おうとの阿弥陀仏  
のお誓いであります。それゆえ弥陀の誓願  
不思議とは(名号を称えるものを浄土にむ  
かえとらんと、御約束)、すなわち弥陀が  
へかならず浄土に往生させるから、そのま  
まなりで念仏してこい、その外に何もいらぬ

ぞ)との全く不思議な大悲の誓約でありま  
す。このお誓いを有縁の善知識からお聞か  
せいただき、(ああこんな私を、ナムアミダ  
ブツ)と口に出るかでないうちに、はやもう  
阿弥陀仏に撰め取られて、阿弥陀仏と離  
れない身にさせていただくのであります。そ  
れはまた正定聚の位に入ることになるのだ  
と仰せられ、浄土に生まれて仏になるべき  
身に定まったものたちの仲間に入らせてい  
ただくのであるといわれるのであります。こ  
の上なき幸せを現在ただいまからいただく  
のであります。

「助けてやるで念仏申せ」との仰せです  
から、当然このお心を受け入れることは念仏  
申さんと思ひ立つ心が起きるのでありま  
す。受け入れることが信心であり、信順で  
あります。本願に順う心が信心であり、本  
願に順う行いが念仏であります。ですか  
ら、「弥陀の誓願不思議にたすけられま  
いらせて、往生をばとぐるなりと信じて  
念仏もうさんとおもいたつころのおこ  
る」ということは念仏往生の願に信順し  
たおのずからなる姿であります。

そしてこの本願を信じ念仏申すところ  
に、「撰取不捨の利益にあずけしめたも  
うなり」とのお示しです。これは親鸞聖  
人によつてこと鮮明にされた教えの一  
句であります。聖人は、正定聚の位に住  
するの、信心が定まるの、あるいは  
未来永遠の救いも、現在ただいまの救い  
も、あるいは来世の救いもこの世の救い  
も、どこで実現するかといえ、弥陀の  
本願を信じるところ、すなわち撰取不捨  
の利益をいただくところに定まることを  
明確に示されました。それは聖人八十五  
歳の時に感得された

弥陀の本願信ずべし

本願信ずるひとはみな  
撰取不捨の利益にて  
無上覺をばさとするなり

というご和讃に明らかであります。

私たちがこの身このままなりで、ただ  
弥陀の本願を信じる一つで撰取不捨の利  
益にあずかるということ、これはなんと  
大いなるできごとでしょう。古今東西、  
無数の人たちが真実を求め、まことの神  
を求め、真の仏にあいたい、願いつづ  
けてきました。それは決して特殊な人た  
ちだけの「求め」ではありません。人  
である限り、意識しているかしないかに  
かわらず、人は変わらぬまことを心の  
底で求め、変わらぬ愛を求め、永久の光  
を求め、壊れぬ幸せを求めてきました。  
しかし多くの人にとつてそれは高嶺の花  
であり、「山の彼方の空遠く」であつて、  
現実化することはなかつたのでした。

ところが、私たちは今ここに万人にか  
けられている弥陀の本願を、その仰せの  
ままに信順する一念に、仏と人が結びつ  
く、仏と人が離れなくなるという撰取不  
捨の広大な利益をたまわるのであり、ま  
ことに有難きことでもあります。

地位も名譽もお金も、やがて私から剥  
奪されていきます。健康もこの世のいの  
ちも私から奪われていきます。愛する夫  
も妻も子供たちからも、遠からず別れね  
ばなりません。親しんできたこの世との  
別離が待っています。私はいったどこ  
へ行くのか、何も分からぬまま一日一日  
と過ぎゆきます。ただ目前の娯楽・享樂  
ばかりに目がいつて、私が永遠の孤独な  
る流浪の民であることを忘れていきます。

無量寿経に

一人、世間の愛欲の中にありて、独り生

じ独り死し独り去り独り来りて、行にあ  
たり苦樂の地に至りおもむく。身みずか  
らこれをうくるに、だれも代わる者なし。  
善惡變化して殃福処ことなり、あらかじ  
め嚴待してまさに独り趣入すべし」

(人は世間の情にとらわれて生活してい  
るが、結局独りで生れて独りで死に、独  
りで来て独りで去るのである。すなわち、  
それぞれの行いによつて苦しい世界や福  
樂の多い世界に生まれていく。すべては  
自分自身がそれにあたるのであつて、誰  
も代わつてくれるものはない。善い行い  
をしたものは福樂の多い世界に生まれ、  
悪い行いをしたものは苦しい世界に生ま  
れるというように、おのおのその行く先  
が異なつており、嚴然とした因果の道理  
によつて、あらかじめ定められていると  
ころにただ独り生まれて行くのである)

とあります。阿弥陀の目から見られた私  
どもの姿を教えてください。静か  
に一生を顧み、また行く末を思うとき、  
この仏語の通りではないでしょうか。

私たちは私たちの姿を知らず、ただ目  
前の快適さばかりを追い、一生空しく終  
わつてゆくことを悲しまず、それゆえ永  
遠の救いを求めない。そんな私のまこと  
の姿を知らしめてくださり、そのような流  
転の彷徨人たるものに阿弥陀仏が大悲を  
もつて喚びかけてくださる、その弥陀の  
誓願不思議を積尊はお説きになり、聖人  
は親しくお示しくくださったのでありま  
す。その如来聖人から「弥陀の誓願不思  
議にたすけられまいらせて、往生をばと  
ぐるなり」との仰せを聞き、信じて念仏  
もうす。この一道ありて私たちは永遠無  
限な真実(智慧と慈悲)に離れぬ撰取不  
捨の恵みをたまわるのであります。

(了)

## 【初めての韓国3】

大邱（テグ）の駅前から、海印寺（ヘインサ）

方面行きのバスに乗る。下車して小高い道を上ると寺に着く。お参りを済ませ、本堂の入り口あたりに座って周囲の美しい景色にみとれる。静寂で清浄である。そうこうしていると小学生の団が下からやってきた。なにせ海印寺は韓国で最も有名な寺の一つだから見学や修学旅行も多いのである。生徒たちは本堂に入り、先生が一行に並ばせた後、礼拝をさせる。身をかがめ額を畳につける敬虔な礼拝を先生の指図の下、五十人ばかりの小学生たちが一斉に身を屈して礼拝を始めたので少し驚いた。日本だったらこうはならない。修学旅行で京都の名刹にやってきても大抵はただ見て回るだけである。韓国の民衆は日本よりもずっと仏教信仰なり宗教信仰には厚いものがあること一端を感じたことであつた。この海印寺は韓国三大寺刹の一つで、八〇三年創建。現在の建物は李朝末期のもの。この寺には国宝の「高麗大藏經」の版木が保存されている。版木の書庫を見学。この大藏經の版木は高麗時代の十一世紀にできたが、蒙古の襲来によって消失。十三世紀に再び八万枚あまりの版木を彫って完成させ、現在もこの海印寺に収まっている。それで「八万大藏經」ともいわれている。この大藏經は厳密な校訂が為されていることから学術的に評価が高く、日本で完成させた「大正大藏經」の底本ともなった。書庫から庭に出て座っていると、奥の建物から一列になつて尼僧さんが現れた。長い行列で百人はゆうに越える数である。それに年齢も若い女性がほとんどである。こうした光景も日本ではもはや全く見られない。寺を出ると空腹を感じるも門前に食堂はない。おみやげ屋さんがあつたので、食事はできないかと訊くと、作ってあげようということになり、だいぶ待って精進料理が運ばれてきた。光州（ガンジュ）方面に行きたいという主人が

わざわざ丘の下のバス停まで案内してくれ、乗るバスを指示してくれた。それからバスに乗り、どこに降りたか、そこで光州方面のバスに乗り、よく並んでいると、若い韓国僧のK師が話しかけてきた。松広寺に参拝したいのでまず光州市にいくのだという、自分も光州まで行くので一緒にということになった。すべて漢字の筆談である。光州市に着くと、彼が知り合いの寺に行こうというので、ついて行つた。狭い路地を入っていくと、ごく小さな寺に入った。そこにおばさんがいて、彼がなにやら話をし、この寺にはからずも泊まることになった。夕食近くなつて、年配の僧がやってきた。かの僧は日本語が話せるので少しばかり話したが、その中で朝鮮を「チョウセン」と発音するのはよくない。チョンソンと発音するように」と私に注意を促した。チョウセンという響きは朝鮮民族への蔑視の響きを伴うとの意味と私は受け取つた。その後、夕食がだされたが、全くの菜食で、もやし料理がメインであつた。夜になり一室にその若い韓国僧のK師と寝ることになった。寝る前に彼が般若心経を日本語で唱えてくれという。仏教僧なら般若心経を空んじられるのは当たり前のこと。ところが私は浄土教徒で般若心経は暗唱できない。これには困つて、話をそらせてその場を逃れた。寝る時間となり彼が私とややひつつくように枕を並べるのでいささか戸惑つた。日本では兄弟や親戚の人と寝るのもこれほど近くに枕を並べない。初めはひつとしたら性癖のある人ではないかと心配したが、そうではなくそれは民族性であつて、人と人の間が韓国では日本よりも短い間隔でスタンスを取るのであらうと理解した。寝てから幾ばくかたつただろうか、突然K師が起きて部屋ハダカ電球をつけた。何事かと思つて私も起きた。まだ朝の三時である。こんな時間に起きてどうするかと思いきや、仏堂の内外にローソクをたくさん灯し、勤行が始まる。私は寝ているわけにいかず、一緒にお勤めに参ずる。長い朝の勤行が終わり、朝食後、寺を預かる奥さんとも

別れてK師の案内で松広寺に向かった。(続)